Save the Children

セーブ・ザ・チルドレン ニュースレター
September 2024 No.85

特集 2024年 能登半島地震 緊急・復興支援

特集 2024年 能登半島地震 緊急・復興支援

2024年1月1日に最大震度7を観測した能登半島地震。セーブ・ザ・チルドレンは、発災直後から石川県で被災した子どもたちやその家族、子ども関連施設への支援を続けています。

緊急子ども用キットなどの提供

避難所などで緊急子ども用キット、ぬいぐるみ、衛生用品、衣料品などを提供

給食補食支援

学校給食の再開に伴い、牛乳やチーズ、ヨーグルト、ミックスナッツなど小中学校や幼稚園・保育所への補食支援を実施

1月1日 地震発生

1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月

子ども支援のニーズを調査

現地に入り子ども支援のニーズ調査を開始（七尾市・穴水町・能登町・珠洲市・輪島市）

「こどもひろば」実施

子どもたちが安心・安全に過ごせる空間「こどもひろば」を避難所などで実施

備品支援

小中学校、学童保育、幼稚園・保育所などに暖房器具やプリンター、学校給食の再開に必要な食器などの備品支援を実施

屋外での「子どもの遊び場」実施

子どもたちが屋外でのびのびと遊ぶことができる「子どもの遊び場」を実施

輪島市の小中学校にプリンターや給食簡易食器を支援

能登町で小中学校の共同調理場用の備品を支援

7月以降も能登半島地震緊急・復興支援として活動を継続中

専門的人材サポート

子どもの保育を支える専門的人材サポートを実施

輪島市で屋外での「子どもの遊び場」を実施

能登町で屋外での「子どもの遊び場」を実施

「2024年 能登半島地震 子どもアンケート」実施

主に石川県七尾市、穴水町、能登町、珠洲市、輪島市に在住する小学4年生から高校生世代を対象に、地震や復興についての思いや意見を聞く子どもアンケートを実施

子どものための心理的応急処置（PFA）

セーブ・ザ・チルドレンは、子どものためのPFAの情報提供とともに、石川県内の子ども支援関係者などに対し、「子どものためのPFA」の理解を深める研修を実施しています。

地震や事故などの危機的な出来事に直面した子どもたちは、普段とは異なる反応や行動を示すことがあります。「子どものためのPFA」は、そのような子どもたちのこころを傷つけずに対応するための方法です。

セーブ・ザ・チルドレンは1月と2月に、災害派遣精神医療チーム（DPAT）や日本赤十字社と連携し、石川県や七尾市などが主催する、学童保育支援員を対象にした研修や講座を実施しました。また、6月下旬には 珠洲市で、子どもセンターを利用する保護者向けに「子どものためのPFA」の要素を含む座談会を実施しました。

「子どものためのPFA」パンフレット
QRコードからダウンロードできます

子どもの保護

子どもの安心・安全を守る

保育所・幼稚園・学童保育などの支援

能登半島地震のような大きな災害のあとに、災害前から地域で子どもたちを支えていた施設や機能が再開することは、子どもたちの日常性の回復につながります。保育所や放課後児童クラブ（学童保育）の運営再開のために、必要な備品提供や専門的人材のサポートを実施しました。

放課後子ども教室などの再開をサポート

子どもの放課後や長期休暇を支える支援員も被災し、珠洲市では一部の放課後子ども教室、長期休暇中の一日保育が難しい状況でした。セーブ・ザ・チルドレンは、以前からつながりのある団体と連携して、放課後子ども教室、春休み一日保育の運営のため専門的人材をサポートしました。

屋外での「子どもの遊び場」実施

被災した地域では、さまざまな理由で子どもたちが外で遊べる場所や機会が少なくなっています。子どもたちが思い切り外で遊べる機会をつくるため、災害時の遊び場支援で連携している一般社団法人プレーワーカーズや地域で活動に協力してくれる関係者とともに、輪島市と能登町の公園で「子どもの遊び場」を実施しました。木にロープをつるして作ったブランコや端材工作、風船やシャボン玉遊びは子どもたちに大人気。楽しそうな声が公園にあふれていました。

教育

子どもの学びの環境整備のために

給食補食支援

七尾市・能登町・穴水町・珠洲市で、学校再開後、徐々に簡易給食の提供などが始まりました。しかし、断水が続いていることに加えて、給食用の食材を準備することや調理場が被災し発災前と同じようなメニューを作ることが難しい地域もありました。栄養バランスのとれた食事を子どもたちに提供したいという声を受け、各地域のニーズを確認しながら小中学校や幼稚園・保育所へヨーグルト、牛乳、野菜ジュース、チーズ、フルーツゼリーなどの補食支援を実施しました。

備品支援

学校では、地震によって備品や給食室の設備などが破損するなど、再開に向けてさまざまな困難がありました。セーブ・ザ・チルドレンは、それぞれの市町のニーズを聴き取り、学校再開に必要な暖房器具やプリンター、給食の再開に必要な冷蔵庫、回転釜などの備品を支援しました。

スタッフの声

発災直後の1月から現地に入り活動する中、いまだ倒壊した建物が残ってはいるものの、徐々に復旧・復興が進んできています。仮設住宅の建設や引っ越しも進む一方で、今までと違った環境やこれからの生活について子どもたちもそれぞれの不安や思いがあると感じています。そうした子どもたちのモヤモヤを汲み取り、今後の活動につなげていけるよう、引き続き地域に寄り添った支援を進めていきたいと思います。

国内事業部　国内緊急支援・防災事業チーム　マネージャー **山田心健**

子どもにとって「遊び」とは

避難所でなぜ遊びが必要なのか

遊びやまなびの場を突然奪われた子どもたちは、大きなストレスを抱えていることがあります。「こどもひろば」は、避難先で子どもたちが普段していたような遊びやまなび、友だちと過ごすことができる安心・安全な空間であり、より日常に近い生活を取り戻すための手助けとなります。

たびたび「避難所でなぜ遊びが必要なのか」、と聞かれることがあります。遊びは、子どもの知的、社会的、情緒的、身体的な発達に不可欠で、災害だからといって子どもの発達を止めることはできません。また、避難先で、子どもが安全な空間で安心して日常に近い遊びや活動ができることにより、子どもが困難や逆境にうまく適応する力(レジリエンス)を支え、強化し、こころと体が健康でいられることに役立つと言われています。加えて、「こどもひろば」が毎日同じ時間に実施されることで、避難所でも生活リズムを維持することができ、学校などの再開時も災害前の生活リズムに戻りやすくなります。

「こどもひろば」では、子どもたちがポロっと災害の体験を話したり、遊びの中で表現することもあります。そして、子どもたちが自然に感情を表現したり、共有していくことで、少しずつ災害のことを自分の中で整理したり、理解していき、こころの安定につながると言われています。子どもたちも大人と同じように、困難や逆境を乗り越える力を持っています。災害の影響を受けた子どもたちが自らの力を発揮し、少しずつ困難を乗り越えていけるよう、セーブ・ザ・チルドレンはさまざまな関係者と連携しながら支援を続けていきます。

能登町で屋外での子どもの遊び場を実施

数字で見る 能登半島地震 支援活動

2024年1月～2024年7月15日時点の実績

緊急子ども用キットなどの提供
のべ 793人

備品支援
32ヶ所
3,084人

給食補食支援
33ヶ所
2,615人
のべ30,934食

「こどもひろば」実施
19回
のべ 200人

屋外での「子どもの遊び場」実施
11回
のべ 393人

給食簡易食器(使い捨て食器)支援
11ヶ所
826人

「子どものためのPFA」研修
6回
のべ 623人

子どもや保護者からの声

能登町の公園で子どもの遊び場

保護者の声
「子どもは前日から楽しみにしていた。当日の朝も早く行く、絶対に4時まで遊ぶ！と張り切っていた」
「震災前から遊ぶ場所が少ないが、ますますなくなった。本当にこういう場があって助かる」

穴水町、能登町、珠洲市、七尾市の学校や保育園で補食支援を実施

子どもたちの声
(おさかなソーセージを提供した日に)「好きだから最後までとっておく」「おさかなソーセージ大好き！」
先生の声
「保存が効き、食べられない子どもたちが持ち帰れるのでありがたい」

七尾市の放課後児童クラブ(学童保育)に防災用品支援

学童保育支援員たちの声
「希望してからとにかく早く届いて安心感につながった」
「昨日も地震があって揺れたので、来ていた子どもに使った」

七尾市の保育施設にヒーターやマットを支援

「寒いと子どもたちの気持ちも縮んでしまう。暖まるのでとても助かっている」
「卒園式の練習をしていて、子どもたちが寒くないように練習できている」

飲料やおやつ支援

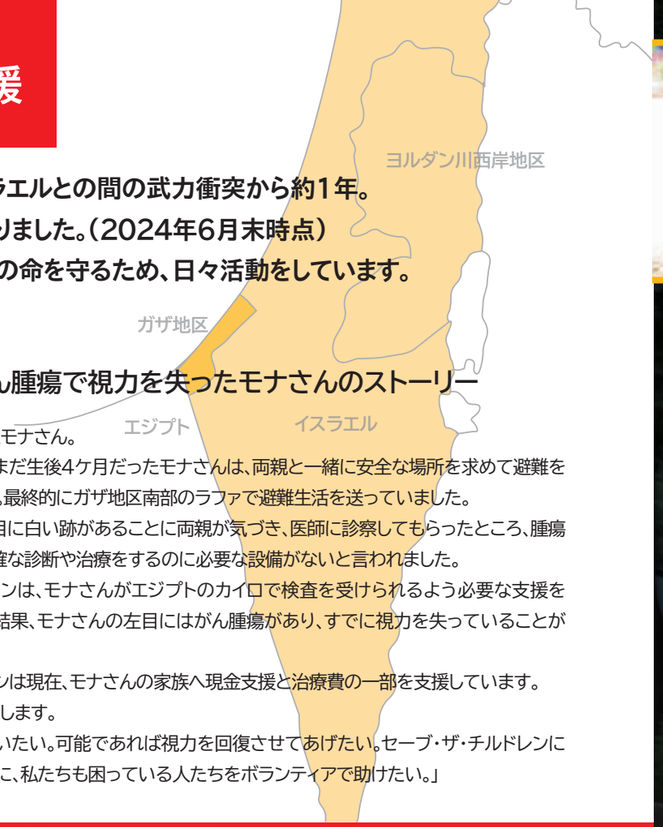
「すぐに支援をいただいたことで、前向きに保育を再開しようと思えた」

ご支援ありがとうございます

能登半島地震緊急子ども支援に寄せられたご寄付は合計**2億4,697万7,232円**(2024年7月15日現在)ご協力いただきありがとうございました。

セーブ・ザ・チルドレンは、石川県内の被災地域の子どもたちに対するアンケート調査を7月に実施し結果を公表予定です。また、秋以降に子どものまなびを支えることを目的とした給付金事業を実施予定です。

パレスチナ・ガザ地区人道支援



2023年10月に発生したパレスチナ・ガザ地区とイスラエルとの間の武力衝突から約1年。
少なくとも1万4,100人以上の子どもたちが犠牲になりました。（2024年6月末時点）
セーブ・ザ・チルドレンの保健医療チームは、子どもたちの命を守るため、日々活動をしています。

がん腫瘍で視力を失ったモナさんのストーリー

©Sacha Myers / Save the Children

ガザ地区で生まれたモナさん。
衝突が始まった日、まだ生後4ケ月だったモナさんは、両親と一緒に安全な場所を求めて避難を余儀なくされました。最終的にガザ地区南部のラファで避難生活を送っていました。
ある日、モナさんの目に白い跡があることに両親が気づき、医師に診察してもらったところ、腫瘍かもしれないが、正確な診断や治療をするのに必要な設備がないと言われました。
セーブ・ザ・チルドレンは、モナさんがエジプトのカイロで検査を受けられるよう必要な支援を行いました。検査の結果、モナさんの左目にはがん腫瘍があり、すでに視力を失っていることが分かりました。
セーブ・ザ・チルドレンは現在、モナさんの家族へ現金支援と治療費の一部を支援しています。
モナさんの母親は話します。
「私たちはモナを救いたい。可能であれば視力を回復させてあげたい。セーブ・ザ・チルドレンに助けてもらったように、私たちも困っている人たちをボランティアで助けたい。」

爆弾で重傷を負ったラミさんのストーリー

ラミさん（7歳）とその家族は、ガザ地区中部で避難していた家に爆弾が直撃し、重傷を負いました。この攻撃で5人の家族が犠牲になりました。
ラミさんは頭と足を、父親は頭と腕と足を、母親は足首と肩を負傷し、きょうだいもやけどや破片による傷を負いました。ガザ地区の病院の状況は最悪で、薬の供給も限られていました。ラミさんの父親は麻酔なしで顔と頭を40～50針縫いました。「手術室には、パンを買うために列をなすように、手術を受けるために人びとが列をなしていた」と話します。ラミさんと家族は、さらなる治療と手術が必要だったため、セーブ・ザ・チルドレンのサポートで、カイロの病院で治療を受けました。
退院後も、ラミさんとその家族はさらなる治療が必要です。私たちは、継続的な治療や補聴器の提供などの支援を行っています。ラミさんの将来の夢は「実業家か整備士」になること。両親は「将来どんな職業に就いたとしても、幸せな人間であってほしい」と話します。

©Sacha Myers / Save the Children

子どもの声が、世界を、変える。 From Cambodia

© Save the Children

セーブ・ザ・チルドレンは、子どもたちが安心・安全に学べるよう、暴力の根絶に取り組んでいます。
この取り組みに参加した生徒の声と、学校の変化を紹介します。

カンボジアのコンポンチャム州の農村で生まれたキムさん（10歳）。キムさんは、小学4年生になったばかりの頃、担任教師から暴力を受けました。
「私の先生は授業中、よく私たちをたたいていました。休み時間に同級生と遊んでいたときのことです。先生は私たちを怒鳴りつけ、私に対して無礼な子どもだと言いました。私は先生に首をきつくつねられ、はっきりとした傷跡が残りました。先生は私の友人たちの顔も平手打ちしました。私たちは先生の前で泣かないよう我慢しました。」
しかし、当時はこの先生の行為が暴力的行為であるとは思っていませんでした。
「先生が怒鳴ったり、誰かをたたいたりすると、クラスの全員が黙っていました。学校に来るたびに恐怖を感じていました。先生に向かって、なぜいきなりたたいたのかと聞いたことがあります。先生はただのボディタッチで、からかおうとしただけだと言っていました。」
その日、キムさんは自転車で家に帰りながら泣き、家族にクラスで起こったことを話しました。キムさんの家族はその後、キムさんと他の生徒の安全な学習空間を確保するため、校長と話をしました。
校長によれば、当時の担任教師は、クラスの子どもたちに暴力をふるったことを否定し、証拠もなかったということでした。そこで、校長は、子どもたちに校長へ直接報告するよう呼びかけました。
セーブ・ザ・チルドレンが実施する事業の一環で、キムさんが通う学校の学校運営委員会と生徒会に対して、子どもの権利、子どもに対する暴力の形態、暴力の予防や暴力を受けた場合の通報方法などをテーマとした研修が実施され、複数ある通報制度の1つとして、意見箱が設置されました。
キムさんは、生徒会のメンバーとして研修に参加し、自身が抱えている悩みと研修で学んだことが関係していることに気づきました。そして、意見箱へ投書する方法があることを知りました。
「私は自分が悩んでいることを書き、校長に教師を変えてくれるようお願いしました。意見は匿名で意見箱に入れました。それでも心配でしたが、問題に対処するための方法だと思い、試すことにしました。」
校長は、6月に意見箱を開けたときに27件の苦情があり、それを証拠にキムさんの担任教師を学校の事務室に異動させたといいます。
「これらの苦情には、生徒に対する暴力や教師と生徒の口論の内容が含まれていました。ほとんどの生徒が、その教師を自分のクラスから外すよう求めていました。」
キムさんは、セーブ・ザ・チルドレンの事業を通じて設置された通報制度と意見箱が、生徒を守り、安全な学校環境を確保する上で役立っていると考えています。
キムさんは話します。
「私たちの苦情を受けて学校が動いてくれ、新しい先生を連れてきてくれたことをうれしく思っています。私は暴力と闘い、同じような経験をするかもしれない他の生徒たちと学んだことを共有したいと思います。」

PARTNERSHIP INFORMATION

Interview

医薬品だけでは解決できない「社会課題」をパートナー団体と連携し実施

第一三共株式会社
サステナビリティ部
グローバルヘルス・
社会貢献グループ
岡原 千久咲 様

地域医療基盤の強化を目指して

第一三共グループは「世界中の人々の健康で豊かな生活に貢献する」というパーパスの実現に向けて、革新的医薬品を継続的に創出し、多様な医療ニーズに応える医薬品を提供することをミッションに掲げています。一方、医療インフラの未整備などの理由により当社グループの医薬品を届けることが難しい国や地域において、NGOなどのパートナーとの連携を通じて医療基盤の強化に貢献することを目指しており、セーブ・ザ・チルドレンの「ベトナム山岳地域の少数民族を対象とした母子の健康を守るための思春期の性と生殖の健康サービス改善事業」を支援しています。

生徒たちの楽しむ姿が印象的だった現地視察

今年の3月に、事業活動を行っている地域をベトナム現地法人のスタッフなどと一緒に訪問しました。少数民族が多く暮らす地域では、児童婚や意図しない妊娠、安全でない中絶、高い性感染症リスクなど多くの課題があります。特に子どもの性と生殖の健康に関する知識は限られており、自分の権利について正しく認識できていなかったり、知らずに他人の権利を侵害してしまう恐れがあります。
約1,000人の生徒が通うヴァン・チャン県の高校で性と生殖に関する健康について学ぶイベントに参加しました。生徒たちと一緒に絵を描いたり、生徒たちによるクイズ大会を見学しましたが、生徒たちは恥ずかしがることなく学んでおり、積極的に楽しみながらイベントに参加している様子が印象的でした。また、難しいクイズの問題に沢山の生徒が正解している姿を見て、本事業の成果を感じることができました。
当社グループは、本事業を通じて子どもたちの健康と権利が守られることを心から願っています。また、パーパスの実現のために、今後も医療基盤がぜい弱な地域における医療アクセスの課題解決に取り組んでまいります。

Information

子どもたちの未来がより良いものになることを願って

印刷・製本機械や包装用結束機械などの企画・製造を手掛けるウチダテクノには、帯掛機用クラフトテープの販売で得た収益を2021年より継続して寄付いただいています。クラフトテープの箱にセーブ・ザ・チルドレンのロゴを貼付し、企業間取引（B to Bビジネス）の中でも顧客企業に支援への想いを伝えてくださっています。

トレカの力で子どもたちに一日でも早く笑顔が戻るように

トレーディングカードの第三者真贋鑑定・グレーディングサービスを提供するPSA日本支社（COLLECTORS UNIVERSE JAPAN合同会社）は、能登半島地震で被災された子どもたちへの支援を目的に、2024年2月にPSAに提出されたトレーディングカード一枚につき100円をセーブ・ザ・チルドレンに寄付頂きました。

被災地の子どもたちに心を寄せて

医薬医療用パッケージを製造する株式会社大協精工は、能登半島地震の発生に際し、いち早くセーブ・ザ・チルドレンへの支援を表明し、寄付をいただきました。ウクライナ危機をはじめ、国内や世界で発生しているさまざまな子どもの課題に心を寄せ、子どもたちへの支援を支えてくださっています。

スタッフの一日

バングラデシュ駐在員
田部井　梢

バングラデシュの子どもたちが虐待やネグレクト、搾取、および暴力などのリスクから守られるように、地域住民や行政とともに子どもを守る仕組みの強化を行っています。

バングラデシュってどんな所？

バングラデシュの南東部コックスバザールに駐在しています。ここには、世界最長のビーチと100万人のロヒンギャ難民が住むキャンプがあります。元々社会経済的に困難な地域でしたが、多くの難民が避難してきたことで、地域の人たちの暮らしは大きく変化してきています。

1 8:00 シュボ ソカール！（おはようございます！）

コックスバザール事務所には、ロヒンギャ難民支援のために約370人のスタッフが働いています。私たちのチームのメンバーは5人です。

2 8:30～午前の仕事

今日は地域の子どもたちの活動を視察します。子どもたち自身が子どもの権利や子どもの保護について知り、友だちや地域の子どもたちが抱える課題を話し合えるようにお手伝いをします。子どもたちは周りの大人、行政を巻き込んで子どもの保護の課題の解決に取り組んでいます。

3 13:00 ランチ

事業地間の移動中に、道沿いのローカルレストランでスタッフとごはんを食べます。カレーと野菜とお米を手で食べます。みんなで一緒に手で食べるとよりおいしく感じます。

4 14:00～午後の仕事

コミュニティセンターの建設現場のひとつを訪れ、安全で使いやすい施設になるよう地域住民と話し合い、細部を確認します。

5 17:30 退勤後&週末

事業地からの帰路では、道端のお茶屋さんやスナック屋さんに寄り道して、同僚と談笑しつつ小腹を満たします。天気がよい週末は、同僚や友だちとビーチでリラックスすることもあります。

持ち物check!

日差しが非常に強いので、スカーフや傘、日焼け止め、サングラス、塩タブレット、扇子などをカバンに入れています。またチャイルドセーフガーディングのハンドブックもいつも携帯しています。

子どもの権利条約フォーラム 2024 in 東京

東京都豊島区の立教大学池袋キャンパスで
「子どもの権利条約フォーラム 2024 in 東京」を開催します。
子どもの権利条約に日本が批准して30年という節目に、
あらためて子どもの権利について一緒に考えてみませんか。

日程

11月　9日(土)【オープニングセッション、全体会】
11月10日(日)【分科会、全体クロージングセッション】

くわしくはこちら

多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

気候危機と大規模災害 緊急下の子どもたちを いま、守る

Save the Children

洪水に見舞われたシリアの国内避難民キャンプで、仮設住居の前に立つ少女

© Hurras Network / Save the Children

私たちの活動にご協力ください 皆さまのご寄付で、国内外の活動を継続することができます。詳しくは同梱の秋募金チラシをご覧ください。

編集後記

「避難所でなぜ遊びが必要なのか」と聞かれることがあります。セーブ・ザ・チルドレンは、能登半島地震の被災地で「こどもひろば」を実施しました。1月に避難所の「こどもひろば」で活動したとき、大変な中でも子どもたちが、「遊べるの待ってたよ！」「楽しかった！また遊びたい！」とうれしそうに話してくれた姿が忘れられません。本特集では遊びの重要性についても取り上げています。ぜひご一読ください。（編集担当：鳥養）

Save the Children

www.savechildren.or.jp
セーブザチルドレン 検索

セーブ・ザ・チルドレンは、日本を含む世界120ヶ国で子ども支援活動を行う、民間・非営利の国際組織です。子どもの権利が実現された世界を目指し、100年以上にわたり活動しています。

＊この冊子の印刷におきましては、株式会社 技秀堂にご支援いただきました。

表紙写真：能登半島地震の被災地で、屋外での「子どもの遊び場」を実施（石川県能登町、2024年4月撮影）

ミックス 紙 | 責任ある森林管理を支えています FSC® C021940
この冊子はFSC®認証紙を使用しています。

Save the Children
セーブ・ザ・チルドレン ニュースレター No.85 2024年9月発行 発行元：公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F ご支援に関するお問い合わせ：03-6859-0068